

# 7. 斑点米の原因となる吸穂性カメムシ類の適期防除

農業技術センター

## [要約]

斑点米の発生を抑えることを主目的とした吸穂性カメムシ類の防除適期は、出穂10日後頃およびその5～7日後である。また、主要カメムシに対する殺虫活性は薬剤により異なることから、薬剤選択は発生種に応じて行う。

## [背景・ねらい]

近年、高知県の早期稲において吸穂性カメムシ類の加害による斑点米の発生が問題となっており、生産現場から斑点米発生防止対策の確立が望まれている。そこで、主要な吸穂性カメムシ類の発生実態、加害実態および主要種に対する有効な防除薬剤を明らかにし、防除対策の確立を図る。

## [成果の内容・特徴]

1. 主要種であるミナミアオカメムシ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシおよびトゲシラホシカメムシによる斑点米の発生は、登熟後期に加害されるほど多くなる(図-1)。
2. 斑点米の発生を抑えることを主目的とした防除適期は、出穂10日後頃およびその5～7日後である(図-2、表-1)。
3. 主要カメムシ類に対する殺虫活性は薬剤により異なる。バイジットはいずれの種に対しても効果が高い。しかし、スミチオンはホソハリカメムシに対して、エルサン、ランガードはミナミアオカメムシに対してやや効果が低い。トレボンはミナミアオカメムシ、トゲシラカメムシに対して、MR、ジョーカーはミナミアオカメムシに対して効果が低い(表-2)。

## [成果の活用面・留意点]

1. 発生源となる圃場周辺の雑草等を出穂期前までに除去し、カメムシ類の密度を下げておく。
2. 圃場周辺の雑草地も含めた広域防除を行うと効果が高い。

## [具体的データ]

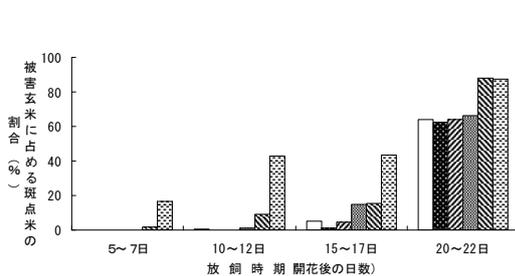


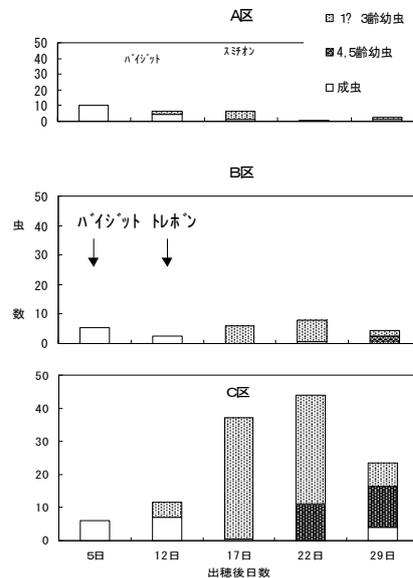
図-1 ミナミアオカメムシの加害時期、加害ステージと斑点米発生との関係

□ 雄成虫 ■ 雌成虫 ▨ 3齢幼虫 ▩ 4齢幼虫 ▪ 2齢幼虫

第1表 各試験区の斑点米粒数

区名	斑点米/精玄米1,000粒
A	0.3
B	1.0
C	1.4

注) 区名は第2図に準ずる。



第2図 各試験区のカメムシ類の発生推移

品種: ナツヒカリ、出穂期: 6月30日

主要発生種: ミナミアオカメムシ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ

A区: 出穂12日後バイジット粉剤+出穂17日後スミチオン粉剤散布

B区: 出穂5日後バイジット粉剤+出穂12日後トレボン粉剤散布(慣行防除区)

C区: 無処理

虫数は、捕虫網40回振り当たり。

第2表 主要4種カメムシに対する薬剤の殺虫効果

薬剤名	補正死亡率 (%)			
	ミナミアオカメムシ	トゲシラホシカメムシ	ホソハリカメムシ	クモヘリカメムシ
バイジット	96.6	100	90	100
スミチオン	86.7	100	60	100
エルサン	53.3	100	93.3	100
ランガード	56.6	87.5	93.3	93.3
トレボン	33.2	0	93.3	90
MR、ジョーカー	6.7	90	100	100

供試薬剤はいずれも粉剤、散布はベルジャーダスター法(500mmHg、各薬剤4kg/10a)による。